

くやしい思いが育てる心

9月13日(火)、秋晴れのさわやかな朝です。今日は清水小学校の校庭をお借りして、運動会の練習をすることになりました。

まず年少組が、かけっこの練習をしました。小学校の校庭の真ん中をまっすぐに走るのとは、とても気持ちよさそうです。様子を見に行ってみると、泣いている男の子がいます。一番になれなかったのが悔しくて泣いているようです。担任の先生は、その子のそばに寄り添って「そうだね、悔しかったね。」「頑張ったんだよね・・・。」



「誰も悪くないよね。」とその子の思いを言葉にしてあげます。4歳と5歳の子どもたちですから、なかなか機嫌はなおりません。先生はその後、ずっとその子から注意をそらすことなく見守っていきます。水筒の水を飲んだり、入場行進の練習をしたりしていくうちに、その子はだんだん落ち着いてきます。そうして、しばらくするといつものようにみんなと一緒に遊べるようになっていたのです。

年少組が校庭から戻ると、今度は年長組が校庭でかけっこリレーの練習を始めました。すると、年長組でもやはりちょっとした事件が起こりました。

リレー競争のバトンパスのときに、丸いバトンが落ちてしまったのです。同じくらいに走ってきた別のチームはずっと先に行ってしまいました。バトンをもらって走るはずだった子はもう悔しくて、その場にしゃがみこんでしまいました。すると担任の先生は黙ってその子を抱えながら一緒に走ってあげました。そして何とか次の子にバトンを渡すことができましたが、その子はしゃがんで、うつむいたままです。リレーは、大きな差ができたまま、終わりました。そこで担任の先生は、今のリレーを振り返って、話し合いを始めました。「次はどんなことに気をつける？」と先生が聞きます。すると子どもたちは「あきらめないで走る。」とか「スタートの音をよく聞く。」とか、「手の形は、グーでもパーでも、自分が走りやすい方がいいと思います。」とか気づいたことを発表します。そうして最後に先生はバトンパスにも触れました。「バトンはちゃんとわたして、しっかりもらうことが大事だね。」その一言で、うずくまっていた子は少しずつ元気を取り戻していきました。そしていつの間にか、またみんなの列の中にしぜんに戻っていきました。

かけっこでは、みんな一番になろうと思って、一生懸命走ります。でもどんなに頑張ってもその回で一番になれるのは一人です。あとのみんなは一番にはなれません。かけっこやリレーなどの「競技」では、誰もが「負ける経験」をします。その「負ける経験」を通して、子どもたちは「負けたとき、どう



やって立ち直るのか」「悔しい思いをしたときにどうやって気持ちを切り替えるか」を学んでいくような気がします。自分の感情のコントロールの仕方を子どもたちは一人一人、自分で見つけていかなければなりません。そのときに自分の気持ちをわかってくれる大人がそばにいてくれたら、どんなに幸せかわかりません。

そうやって育った子は、きっと負けて悔しい思いをしている友だちを思いやることができる優しい子になっていくと思います。